



御修行大師様の前に咲く「オオテマリ」

## お伺い

「あなたは悪を見極める  
ことが出来ますか？」

離婚について四十代半ばの男性が、切実な面持ちでお伺いに見えました。



「一年ほど前に妻から離婚してほしいと言われました。

しかし、別れに踏ん切りがつかず、現在は妻と別居して、二人の子供と一緒に暮らしています。

私は妻が戻ってくることを望んでいます、このまま待っていても良いのでしょうか？ それとも離婚を決断した方が良いのでしょうか？」

神様  
「そなた、神の前へよく足を向けてまいったこと。  
真に心正しき、まっすぐに歩みし者なれば、この後もその心忘れず、わが子と共に、我神となる力を与えて行くゆえ、明るき場へと、(人生の)道を外さず、子連れ(て進むがよい)。  
優しき正しき清きし子たち(は)父なる心(を思い)、早く我の母なる魔力の持つ女子より心(が)切れる(離れる)こと望みしこと願うておる。

我の心ひとつとならねば(心が迷っている間は)、魔力の持つ者(妻)には勝てぬ。

清く正しく生きる者こそ(心)無になりて、我が歩みしことを、何があるうと(妻に)屈してはならぬ。

子と共の喜びなる光ある所へと参られ、必

ずや見出すこととなるう。  
子とて父と母が別れることを望みしおること。

母が、わが子たちを捨てゆき、我の魔力の持つ相手なる者(浮気相手)へと走り、だらしのなき淫らなる者は、決して清きし者へととは変わらぬ」

子供は純粋であるがゆえに、父よりも母の悪なる気に感じていないのでしょうか。



「そなたは(妻を)魔力の持つ魅力と勘違いをいたし、違う所(へ)足を踏み入れたることなれば(そなたも悪に陥る)。  
(じゃが)今まだ、そなたには(心)高きし所あるはず。

なれば、その方角へと子と共に手を取りて進むことに(喜びが)ある。  
何もかも、そなたは誰も知らぬと思うておるうが、そなたの(住み)いる所の者たち、仕事場の者たちは、反ってそなた(の現状)を嘲り笑うておるう。

しかとした態度にて男なるは、その(妻の)魔力に取り憑かれたままにおりては、これから後も我を見失いことある。  
(それでは)子たちは子たちのこれからは如何といたす？

そなたに全てを託したる子たちを、如何なると思うておる？  
我は仕事という高きものを背負うことできるほどの人望厚き者なれば、父親といたしても、この上なき良き高き心持つ父となりて、子と共にしばし段落なる(落ち着きたる)日々を送ることにて、全て解決への道へと進むはず。

もうそなた、この魔力を持つ女子との(修)行は、終わりしことにある。  
(妻を)切り捨ててしまえ。  
そなたの中にありし魔力の残りも全て追い出し、清めてしまうのじゃ。



それを何よりも望みしは、わが子たちにある。  
父として凜といたしたる姿を見せてみよ。

そなたには(妻は)始めより相応しきことない女子なり。  
最後、最後の最後まで、そなたを追いかけて参ろう。

なれど、二度と手をかけることはいたすで

ない」

悪なる場より抜け出すには決別する勇氣と決断する力があるのでないでしょうか。



「全て切り離し、あれ(妻)が惨めになりし時、子たちの元へと参ろうが、それは子の在り方(しだい)。  
子にとりては、やはりそなたと同じ親なれば、(子と妻が)如何なることとなりて行くかは、そなたにはもう知ること(口を出す必要の)なきこと。

そなたと妻とは、元より他人なること。元へ戻るのみじゃ。  
子たちは、どのように惨めなる親になりたとて、継りつきし者なれば、どのような態度にでるかなど、そなたは知ること(は)なく。  
子とは違う道を辿ればよい。

そなたには、そなたの心を満たす、まこと由々しき清きし気高き女子が(そなたの心を)温め、(相性が)合うことというものを知ることできる者となる。  
それまでは我の悲しき冷たき心なれど、決して魔力を持つ女子(妻)に近づきてはならぬ。常に我の心を正し、見つめ直すこと。

そなたには、ただ一つ弱き所ある。  
それは、そなたに寄りて、寄り添う者(が)現れたることなれば、その者に突進して行くこと。  
もはや、そなたも四十半ばを過ぎたれば、人の子ゆえ、我のこのみを考えることはならず。

静かに我の悲しき冷たき心、子たちと共に温め治せ。  
そなただけではない。まだ成熟できぬ子たちの悩み、悲しみは、計り知れぬものがある。

それを思えば、そなたの悲しみ苦しみは、ほんのわずかなることを、よく心いたすことじゃ」  
子供の悩み、悲しみを我が苦しみと思う心が大切ではないでしょうか。



「時が経れば、全ていま決断したしたること、子たちも己も良きこととなったと喜びを持つ時が、必ずやまいる。  
それまでは、仕事(は)大事なれど、わが子たちの寂しき辛き心をも時には思い出し、皆で楽しき時を忘ることなく、(心に)持つこと

にあらう。